

## 令和7年度 第2回 大井川水系流域委員会 議事要旨

### ■開催日時・場所

日時：令和8年3月3日（火） 15:00～17:00

場所：男女共同参画センター あざれあ

開催形式：対面会議／WEB会議

### ■出席者

対面：土屋委員長、戸田副委員長、板井委員、川口委員、中村委員、松本委員、村上委員、

Web参加：絹村委員、溝口委員

### ■議事

- ・ (1) 最近の河川事業を取り巻く話題（資料3）
- ・ (2) 大井川水系河川整備計画の点検（資料4）

### ■議事内容

#### (1) 最近の河川事業を取り巻く話題（資料3）

##### ○流域治水プロジェクト・グリーンインフラ

- ・ 現状資料は“環境活動の羅列”に見え、インフラとしての役割が不明瞭である。利水ダム協力による増電効果や低炭素性など、新しい要素をグリーンインフラの範囲に含めるべきである。  
⇒他水系（例：矢作川）の事例を参考に検討したい。
- ・ 田んぼダム・ため池貯留など流域治水への参画が大井川では不足している。渇水リスク増大や農業水需要の増加を踏まえ、農業者の協力枠組み構築を求める。  
⇒協議会等を通じ、農業関係者との連携を含め、流域全体での取組を促す。
- ・ 泉川・飯淵川は大井川伏流水を水源とするが、現在プロジェクト枠外となっている。工場排水により環境悪化が見られ、自然再生的視点での対応が必要である。  
⇒取り組み状況を把握し、グリーンインフラへも統合可能か検討する。

##### ○内外水統合型水害リスクマップ

- ・ 内外水統合型水害リスクマップを国が広域的に作成する意義は大きい。  
⇒市町の防災力向上につながる資料として活用していく。
- ・ 大井川版として分かりやすいリスクマップに整理すべきである。  
⇒大井川に適した形での公表を検討する。

#### ○技術者不足と国の支援、大学との連携・人材育成

- ・ 市町には技術者不足が深刻である。国の迅速支援は大きな安心材料となる。  
⇒プッシュ型支援・ホットライン強化・災対法改正に基づく体制を強化していく。
- ・ 若者の水防・防災参加が不足しているため、大学と連携した水防災教育の必要と考える。  
⇒大学側の要望にも応じ、様々な学部と連携し得る。

### (2) 大井川水系河川整備計画の点検 (資料4)

#### ○総合水系環境整備事業・宝来地区かわまちづくり

- ・ 宝来地区のかわまちづくりについて、右岸側整備の具体像が不明瞭で、利用目的や将来像が読み取りにくい。  
⇒休憩機能、イベント開催など島田市と連携した活用を想定し、将来的には農道や保安林等を踏まえた改善も検討している。当面は賑わい創出と基盤整備の段階的育成を進める。

#### ○住民参画・情報発信のあり方

- ・ 流域治水に一般の方が参加したくなる仕組みが不足している。企業や住民が自主的に参画できる認証制度や環境活動枠組みの検討が必要である。  
⇒観光・教育等外部との協働やPPP等の枠組みも含め検討していく。

#### ○長島ダムの濁水問題

- ・ 今年は雨が少なく濁り発生頻度は減少したが、豪雨時には依然として濁水が下流へ影響している。漁業者から、濁水により鮎釣りや漁場環境への悪影響が指摘されている。  
⇒長島ダムでは、選択放流設備による対応を継続し、下流環境への配慮を徹底する。

#### ○河川整備に関する新たな視点・河川環境の目標設定の考え方

- ・ 「多自然川づくり」は主に中小河川での実績が多く、大井川のような急流の大河川にどう適用するのか。  
⇒(1)河川環境の目標と(2)生物の生息・生育・繁殖の場を保全・再生・創出はセットで考えることになっている。河川整備計画の見直しの中で、生物の生息生育繁殖の場について定量的な目標を設定する方向であり、調査、モニタリングしながら順応的に管理していく考え方である。この取り組みは全国的にも試行錯誤段階である。  
⇒ネイチャーポジティブや一般的な環境整備手法を大井川で当てはまる箇所を見つけるのが困難な状況である。  
⇒大井川で何を指標に環境評価・数値目標化するかがまだ見えていないのが現状。20~30年前の環境変遷から大井川の河川環境としてもっともふさわしいものを見つけ出し、そこを環境目標に設定していくという流れとなっていくのか。  
⇒そのように考えている。現状は大井川独自の目指すべき河川環境を整理できればと考えている。

○総合的な土砂管理に関する取り組み

- ・ 大井川上流は土砂生産が豊富であるために、ダム群が土砂を貯留するだけでなく連続して続く狭窄部等の土砂堆積が顕著で、堆積域付近の治水上の安全のために河道掘削等土砂の排除を行っている。そうした事象は下流への土砂供給を減らすため、下流河道の変動頻度を減らし網状流路環境に影響をあたえたり樹林化などの治水問題に発展したりする可能性がある。治水安全性・環境の両観点から土砂を必ずしも悪者として扱うのではなく、関係者の協力を得てできるだけ河道を適度に流す仕組みが必要であると考え。  
⇒県や電力会社と連携し、土砂移動の将来像を検討していく必要があると認識している。

(3) その他

- ・ 特になし

以上